ドストエフスキイ研究会便り（９）

カラマーゾフの世界　　― スメルジャコフを巡る人々―

（２）. スメルジャコフ、猫の葬式

はじめに

前回の第１章では、マリアがスメルジャコフに寄せる愛情に光を当て、殊にフョードル殺害前日の二人の逢瀬に焦点を絞り、そこから浮かび上がるスメルジャコフの心の闇を検討した。運命の理不尽さと醜悪さに強い怒りと呪いを抱くスメルジャコフ。その怒りと呪いは彼の内に強い復讐心を育ませ、その呪詛と復讐心は父フョードルと育ての親グレゴーリイばかりか、イワンやドミートリイという異母兄弟にも、また祖国ロシアやロシア民衆や外国人にも、更には千九百年近くの時間を隔てて、イエスと神にまでも向けられていることが明らかとなった。

だが同時に我々の前に浮かび上がったのは、マリアのみならず育ての母であるマルファや、彼女の夫グレゴーリイがスメルジャコフに向ける強い愛情である。我々はこの「親切な人々」の中にアリョーシャが入る可能性についても考えた。スメルジャコフの内に蠢く闇と、彼を取り巻く光との対照。ドストエフスキイはスメルジャコフを闇と光の、そして否定と肯定の強い両極性の内に置き、その極性が究極どこに行き着くのか、様々な人間関係の中で見極めようとしていると考えられる。この問題については、最後の第６章に至るまで、本論の大きな課題であり続けるであろう。

前回我々が主に検討したのは、青年時代のスメルジャコフに関するエピソードであった。今回は、まず彼の少年時代のエピソードに目を向けることから始めたい(1)。筆者が様々に提示するエピソードは皆どれもが、余りにも衝撃的で不吉な謎を秘めたものとして立ち現れ、我々読者はそれら個々の印象に圧倒され、それらが全体として何を示し、何処に向かうかについては十分に考え切らずに終わってしまいがちである。今回は1に続く作業として、改めて彼の少年時代と青年時代のエピソードの全体を概観し、それらが持つ意味についても解釈を試みたい(2)。これらの作業の上で、作者ドストエフスキイが如何なる構図の下に、また如何なるベクトルを以って、スメルジャコフの闇と光を描こうとしているのか、改めて統一的な見取り図を得るべく努めたい(3、4)。そこには新たにイワンという存在が投げる大きな影も浮かび上がってくるであろう。後半は主にこれら異母兄弟二人の「出会い」と「交流」の跡を辿り、後の「対決」に至るまでの道筋を確認する作業である(4、5、6)。スメルジャコフとイワン。これら二人はそれぞれが「ロシアの小僧っ子」として、人間と世界と歴史について、そして神とイエスに対して、闇と光、否定と肯定の両極を驚くほど深く突き詰め、遂には「地質学的変動」の人神思想で結ばれ、「父親殺し」に向けて、それぞれの熾烈なユダ的ドラマを繰り広げるであろう。

２０１８年1月２５日

第2章. スメルジャコフ、猫の葬式　　[第三篇 6 より]

目次　　**[ページ]**

1. 二つのエピソード ― 弱きものたちへの眼 ―　２～７
2. 様々なエピソードの概観 ― それらが指すベクトル ―　７～１２
3. 「観照者」スメルジャコフ ― 蓄えられた「印象」とその爆発の時 ―　１２～１５
4. スメルジャコフの異教者論 ― イワンを向こうに置いて ―　１５～２０
5. イワンとの出会いと交流（１） ― 人神思想の衝撃と受容 ―　２１～２６
6. イワンとの出会いと交流（２） ― 若旦那と下男の「落差」 ―　２６～３１

1. 二つのエピソード　― 弱きものたちへの眼 ―

（1）猫の葬式ごっこ

少年が「大好き」だったこと

少年スメルジャコフが「大好き」だったこと、それは猫の葬式ごっこであった。筆者によれば、少年スメルジャコフは猫を縛り首にした上で、自らはシーツを僧衣のように身に纏い、その猫の死骸の上で何か香炉のようなものを振り回しながら歌をうたっていたという（三６）。全ては「こっそりと」「極秘の内に」執り行われていた。ところがある時グレゴーリイが、スメルジャコフが葬式の準備をしている現場を取り押さえたのである。こっぴどく鞭打たれた少年は「片隅」に潜り込み、その後一週間ほどそこから白い眼をむいているのだった。このスメルジャコフに向かい、グレゴーリイが悪罵を浴びせる。

「お前など人間じゃない。湯殿の湿気から湧いて出た奴だ」（三６）

筆者はスメルジャコフが、その後この悪罵を絶対に赦そうとはしなかったと記す。

「湯殿の湿気」

グレゴーリイが「湯殿の湿気」について言及した背景を理解するために、前回に続いてスメルジャコフの出生の経緯を確認しておこう。

事の発端は、町の住人たちから「孤児（みなしご）」として愛される乞食女スメルジャシチャヤ[臭う女]が、何者かによって妊娠させられたことにある。ごく小柄な身体に冬でさえ粗末な麻の肌着しか纏わず、裸足で町を徘徊する若い知恵遅れの宗教的痴愚（ユローチヴァヤ）たる彼女は、町の人々が金銭や衣類を与えても、直ちに教会や刑務所の慈善箱に置いてきてしまい、本人は平気で黒パンと水だけで命を繋いでいるのであった。町の悪戯坊主たちでさえ彼女をからかうことはなかった。この孤児の乞食女スメルジャシチャヤのお腹が、いつの間にか大きくなって

いたのである。

スメルジャシチャヤを弄んだのは、当時町に潜んでいた脱獄囚の「螺釘(ねじくぎ)カンプ」だとする者もいた。だが町には「好色漢」で「破廉恥漢」の「道化」フョードルだとの噂が広まっていた。満月の鮮やかな九月の暖かい夜、町の上流階級の紳士たちが夜遊びから帰る時のことだ。裏道に沿って帰宅の途中、彼らは道脇の生垣の茂みの中に眠るスメルジャシチャヤを見かける。様々な冗談が飛び交った末に、若い貴族の口から一つの問いが発せられたのである。「誰でも、この獣(けだもの)を女として扱うことが出来るだろうか、今すぐにでも・・・」。この挑戦に飛びつき、「大いに望むところだ」と答えたのがフョードルであった。その後スメルジャシチャヤの身に歴然たる結果が現れる。だがその「父親」については、町の誰一人として実際には確証を持てなかったのである。

ところがやがて出産の夜が来るやスメルジャシチャヤは、庇護されていた商家の厳重な監視を潜り抜け、大きなお腹を抱えたまま、なぜかフョードルの屋敷に向かい、周囲に張り巡らされた高塀をよじ登り、そこから庭に飛び降り、湯殿でスメルジャコフを生み落し、その夜の明け方に死んでしまったのである(三２)。この前代未聞の大醜聞を前に、下男のグレゴーリイが赤ん坊を引き取って妻のマルファと共に育てようとした顛末については、前回詳しく見た(第１章3)。「湯殿の湿気」云々のグレゴーリイの悪罵は、そしてそれに対するスメルジャコフの怨念は、このような彼の出生の事情を踏まえたものだったのである。

スメルジャコフの闇

自らの出生を憎むスメルジャコフ。この青年は自分を慕うマリアにこう語っていた。「グレゴーリイ・ワシーリエヴィチは、私が出生に対して叛旗を翻していると叱るのです。《お前は、母の胎を開いたのだ》と言って。この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」(五２)。前回我々は、この言葉の内に潜む青年の複雑で屈折した心理について検討した（第１章4、5)。そこから明らかとなったのは、「母の胎を開く」という聖句を用いたグレゴーリイの愛に満ちた叱責を、スメルジャコフが意図的に捻じ曲げた可能性、つまりは育ての親に対する彼の屈折した愛憎の心理であり、更にそこに見出されたのは、イエスと神とを向こうに置き、己の理不尽で醜悪な運命について呪詛を投げつける青年、万人万物一切に対して「叛旗を翻す」スメルジャコフの姿であった。

猫の絞殺と、その死骸に向かっての鎮魂の哀歌。自らが残虐な主として、更には憐み深き主として、弱き哀れな小動物の生と死の一切を司り、運命の完全なる支配者として振舞おうとの「禁じられた遊び」。ここで我々が出会うのは、既に少年スメルジャコフの内に渦巻く闇であり、殊に自らの運命と重ねられた弱きものたちの運命への凝視と、それらに対する歪んだ愛憎の表出と考えられる。少年時代の猫の葬式ごっこと、フョードル殺害前日のマリアとの逢瀬。筆者が伝えるスメルジャコフの生活史において、これら最初と終局近くのエピソードを貫くのは、理不尽で醜悪な自らの出生と運命を凝視するスメルジャコフ

の姿と、その内に蠢く孤独と闇、更にはそこから閃き出る怨念と復讐の恐るべき刃と言ってよいであろう。

スメルジャコフを取り巻く「親切な人々」

「お前など人間じゃない。湯殿の湿気から湧いて出た奴だ」。先に見たようにスメルジャコフは、グレゴーリイが浴びせたこの罵りの言葉を、その後絶対に赦そうとはしなかったとされる。だが注意すべきである。筆者は、スメルジャコフが赦さなかったのはグレゴーリイの罵りの言葉であり、決してグレゴーリイその人とは記していないのである。

前回我々が確認したのは、スメルジャコフの誕生にあたってグレゴーリイが示した深い信仰心と愛であり、そして「母の胎を開く」という聖句を用いたグレゴーリイの叱責の内に脈打つ、これもまた強い信仰心と愛であった。一方スメルジャコフ自身も、この育ての親の粗暴さの裏に潜む愛をよく知っていたのである。スメルジャコフを描く筆者の筆は、ただ運命への怨念と復讐心を燃やす悪魔的な青年像を刻むのではなく、同時にグレゴーリイ夫婦やマリアやアリョーシャなど、彼を取り巻く「親切な人々」とその愛をも丁寧に描き込んでいるのだ。そして筆者は、これらの人々を深く理解するスメルジャコフを示すことも忘れてはいない（十一６・８、第１章4（１））。もし我々がグレゴーリイを、スメルジャコフに対してただ悪罵を浴びせ厳しい懲罰を以って臨むだけの無教養で粗暴な下男としてしか捉えず、またスメルジャコフを、養父から注がれる愛情を一切感受することのない孤独な冷血漢としか考えないとするならば、グレゴーリイをもスメルジャコフをも共に凡庸で底の浅い人物像の内に閉じ込めてしまい、作者ドストエフスキイが彼等を置く本来の布置、神の愛と「キリストの愛」を巡る「闇と光」の対立という作品の原構図を見失ってしまう危険が大であろう。

かくして猫の葬式ごっこに対する湯殿云々のグレゴーリイの痛罵もまた、信じ難い恐るべき悪魔性を現わし始めた少年スメルジャコフを目の当たりにして発せられた、単なる絶望や怒りや呪詛の叫びと受け取るべきではないであろう。グレゴーリイの鞭打ちと痛罵の底に潜むものとは少年に対する愛であり、またこのことを他ならぬ当の少年自身が一番よく知っていたと考えるべきであろう。少年が赦せなかったのは、自分を粗暴に鞭打って罵倒する育ての親グレゴーリイその人ではなく、自分を「湯殿の湿気」のようにこの世に「湧き」出させた、運命の理不尽さと醜悪さそのものだったのだ。

スメルジャコフが向かうベクトル

少年スメルジャコフの心を強く捉えるようになったもの、それがまず己の出生と運命に対する痛ましいほどに強い関心であり、また強い疑問と懐疑であったことは想像に難くない。前回我々は彼の名前そのものが、既に彼にとっては赦し難い侮辱であり屈辱であったろうと考えた。この侮辱感と屈辱感は、自分の出生を巡る世の人々の好奇心や様々な噂への反発や、父と目される人物の下で下男を務める日々の生活への疑問などと相俟って、次

第しだいに少年の心の内で発酵していったのであろう。やがて彼の目が向かう先は、弱き哀れな小動物たちばかりか、スメルジャシチャヤを戯れに凌辱して自分を孕ませ、「湯殿の湿気」のようにこの世に「湧き」出させた「好色漢」で「卑劣漢」、しかもその自分を下男として使う「道化」の父フョードルその人にも向けられてゆくのは不可避のことであったと考えられる。更に焦点は、このような形でしか自分をこの世に存在させなかった運命そのものに絞られ、遂にはその理不尽で醜悪な運命を究極において司る「神」と、その「神の子」イエスにまで絞り込まれていったと考えるのが自然な筋道であろう。

このスメルジャコフが成長する様について、筆者はグレゴーリイの言葉を用いてこう表現する。「およそ感謝の心というものを知らずに育ち、常に片隅から世を窺う、人見知りの激しい少年になった」(三６)。また成長したスメルジャコフについて、筆者自身も「二十四歳そこそこのまだ若い」この青年は、「極度の人間嫌いで、言葉も少なかった」と記す。但しそれは単なる「人見知り」とか「羞恥心」というようなものではなく、むしろ逆に、彼の「性格は傲慢で、全ての人間を軽蔑しているかのようであった」とされるのである(同上)。

「人間嫌い」「寡黙さ」「傲慢さ」、そして「人間への軽蔑」。スメルジャコフの内なる孤独、あるいは闇を表現すべく筆者が用いる言葉は強くて厳しい。だがこれらの言葉だけでスメルジャコフの心を捉え切ったとは言い難く、加えて筆者が提供するエピソードの多さとその衝撃度の強さは我々を混乱させ、その結果恣意的で歪なスメルジャコフ像を結ばせてしまう恐れがある。スメルジャコフが成長と共に現わし始めた、人の心を慄然とさせ凍りつかせるような異常さや悍ましさを前にして、繰り返しとなるが、この存在を単なる孤独で残虐な冷血漢とか性格異常者などという出来合いのレッテルを貼ることは禁物である。前回我々は、スメルジャコフが露呈させる様々な現象の極限の姿を、父親殺害前日のマリアとの逢瀬の内に見出せると考え、そこに彼自らの出生と運命に対する痛烈な怒りと呪いの、意識的あるいは無意識的な表出を認めたのであった。そしてその行き着く先には、イエスと神への痛切な呪詛の叫びが見出されたのである。今回も我々は、少年スメルジャコフの猫の葬式ごっこという衝撃的なエピソードから入り、更に筆者が提供する様々なエピソードを検討しつつ、少年の内面の全体像を、そこに蠢く闇ばかりでなく、もしあるとするならば、その闇から発せられる光をも捉えることを課題としたい。殊に本章の最後（5・6）では、帰郷したイワンとスメルジャコフとの間に生まれるドラマを追い、そこでイワンが彼の内に何を見出すに至るかに着目したい。

(2).ジューチカ事件

復讐劇の前奏曲

スメルジャコフ。その心の闇を理解するために、次に我々は少年時代の猫の葬式ごっこから十数年が経った時のこと、つまり父親殺害に先立つ一か月ほど前、スメルジャコフが密かに一人の少年を唆して起こした事件、これもまた小動物への残虐極まりない仕打ちについて見ておかなければならない。ちなみにフョードル殺害事件を中心とする作品の「現

在時」において、スメルジャコフは二十四歳であり、異母兄弟のイワンと同年齢である。

小動物への残虐極まりない仕打ち。それは父スネギリョフの失職により一家が貧困の底に突き落とされた少年、イリューシンを巻き込んでの事件である。ゾシマ長老とフョードルとが立て続けに死ぬおよそ一か月前、つまり前回我々が見たマリアとの逢瀬より一か月前のことだ。スメルジャコフがイリューシン少年を唆し、ピンを埋め込んだパンを仔犬のジューチカに呑み込ませたのである。少年コーリヤの表現によれば、この「残酷で卑劣ないたずら」によって、ジューチカは悲鳴を上げてのた打ち回り、そのまま何処かへ姿を消してしまったという（十４）。この「ジューチカ事件」によってイリューシンが陥る地獄について、またこの事件の後一週間ほどが経って起こる「垢すりへちま事件」について、そして他の少年たちと共にこの子の苦悩に寄り添うアリョーシャについては、第４章（「研究会便り（１１）」）の主要テーマとしよう。

さて事件の残虐さと共に我々が驚かされるのは、スメルジャコフとイリューシン少年との意外とも言うべき結びつきだ。この二人こそ『カラマーゾフの兄弟』の主要テーマである、何層にもわたる「罪なくして涙する幼な子」たちの最も奥底に位置する不幸な存在と言うべきであろう。だがそもそもスメルジャコフは、イリューシン少年と如何にして知り合ったのか、また二人の間には如何なる交流があったのか、筆者はそれらについて具体的なことは何も記さない。それだけ一層スメルジャコフが世に対して、具体的には家畜追込町の現実に対して向ける鋭利な目線と、そこで運命に虐げられて苦しむ弱き孤独な存在を嗅ぎ付ける恐るべき、悲劇的とも悪魔的とも言うべき鋭敏な嗅覚が浮かび上がる。

グレゴーリイに鞭打たれ、片隅で白い眼をむいていたスメルジャコフ。自ら猫を殺してその葬式ごっこを好む少年が、その後青年になるまでに自らの視界の内に捉え、冷たい視線を投げるに至ったのは父フョードルであり、異母兄弟たちであり、ロシアとロシア農民と外国人であり、そしてイエスと神であったことは今まで見てきた通りである。だがその一方でスメルジャコフは、社会の底辺に突き落とされ悲惨な生を強いられた少年ばかりか、人間よりも遥かに弱い存在であることを運命づけられた猫や仔犬という小動物たちにも目を注ぎ続けていたのだ。しかも彼はそれら弱く哀れで孤独な存在たちに対して、いたわりの心や愛の手を差し向けるどころか、逆にそれらの存在が受けた傷に塩を擦りつけるように、更に彼らを苦しめ、更に悲惨な運命の底に突き落とそうという、冷酷かつ残虐な欲求に駆られる若者でもあったのだ。自らの理不尽で醜悪な運命を下地として、そこから逆にありとあらゆる存在の生の真偽と是非を問い、そればかりかその運命を自らの力で司り得るか否かを窺い続けるスメルジャコフ。十数年を隔てたこれら猫と仔犬二つのエピソードから浮かび上がるものとは、悪魔的とも悲劇的とも言うべき、また形而上学的とも宗教的とさえも呼び得る、スメルジャコフの心の傷であり、またその心の闇である。

闇と光、作品の原構図

さて忘れてならないことは、ジューチカ事件と前後して、少年たちとアリョーシャとの

交流を中心とした、一連のドラマが展開するということである。『カラマーゾフの兄弟』の一方の極をなす胸を打つ、未来を含んだ若者たちのドラマである。つまり事件に先立つコーリヤとイリューシン、二人の少年が繰り広げる心理的葛藤（十４）。事件の後、イリューシン少年が捕えられる痛切な「良心の呵責」（同上）。また事件直後に起こる、ドミートリイによる少年の父スネギリョフへの侮辱事件、つまり「垢すりへちま事件」（二６、三５、四５,６）。これを受けて、ドミートリイの弟アリョーシャに対する、イリューシン少年の復讐(四３)。そしてドミートリイの婚約者カチェリーナに請われての、アリョーシャのスネギリョフ家訪問(四６)。更にはアリョーシャやコーリヤたち少年との交流を含んだ、ジューチカの復活劇（十４）。最後にイリューシン少年の死と埋葬、そしてアリョーシャの「告別説教」（エピローグ３）等々・・・ これらだけで少年たちを巡る作中劇、優に一編の長編小説が出来上がるであろう。

これら一連のドラマで注目すべきは、運命に虐げられたイリューシン少年の前に、アリョーシャが大きな役割を持って登場することである。またイリューシン少年の苦悩の向こうには、ジューチカ事件を介して、スメルジャコフの存在が大きな影を投げていることも忘れてはならない。前回指摘したように、また第４章以降でも見るように、マリアとスメルジャコフの逢瀬の場にアリョーシャが「くしゃみ」と共に登場したことは、やはり決定的な意味を持つことなのだ。作者がこの作品の一方の極たる存在としてスメルジャコフを置いたとするならば、それに拮抗するもう一方の極がアリョーシャと言えよう。「罪なくして涙する幼な子」たちと「実行的な愛」の人アリョーシャ、闇に対する光、「否定（プロ）と肯定（コントラ）」 —— これら両極の究極の帰結点を探る作者ドストエフスキイの問題軸、あるいは原構図と言うべきものが改めてここに浮かび上がる。

2. 様々なエピソードの概観　— 少年時代から青年時代へ —

さて少々回り道のように見えるが、我々はここで一度改めてスメルジャコフに関する様々なエピソードを、少年時代から青年時代へと時間軸に沿って概観し、それらが持つ意味について考え、それらに通底するスメルジャコフ像を浮かび上がらせる試みをしておこう。この基礎作業の上で、彼の内深くに潜む闇について更なる考察に進もう。

少年の頃

少年スメルジャコフの猫の葬式ごっこ。これに続いて筆者が記すのは、育ての親グレゴーリイが少年にまず読み書きを教え、十二歳になると聖書を教えにかかったという事実である(三６)。テキストとしては旧約の創世記が選ばれたようだ。ところが家庭内でのいわば「寺子屋」教育が始まり、まだ二回目か三回目の「授業」の時のことである。筆者は突然生徒が薄ら笑いを浮かべたと記す。眼鏡越しに「どうしたんだ？」と訝る教師に向かい、

生徒は問う。世界創造にあたり、神様が第四日目に太陽や月や星々を創られたとするならば（創世記 一 14-19)、第一日目に神様が創られたという光はどこから射したのか。生徒は教師を嘲笑うかのように眺め、その眼差しには何か傲慢な影さえ宿っていたと記される。「そら、ここからだ！」。教師はこう叫ぶや生徒の頬を張り倒す。生徒はこの頬打ちを堪え、言葉を返さず、猫の葬式ごっこの時と同様に、再び幾日か片隅に潜り込んでしまうのであった。

癲癇発作

それから一週間後のことだ。スメルジャコフに生涯つきまとうことになる癲癇の発作が初めて起る。筆者はこれを機に、フョードルのスメルジャコフに対する姿勢が以前とは違ったものになったと記す。つまり彼は、少年の内から現れ出た新たな病への様々な気遣いを示したばかりか、グレゴーリイには体罰を禁じ、少年をグレゴーリイ夫婦の暮らす下男小屋から、自分の住む母屋の方に移り住まわせるのであった。

それから三年ほどが経ち、スメルジャコフが十五歳になった頃のことだ。少年が本棚の書物の背表紙をガラス越しに覗き込んでいる姿が見かけられるや、フョードルは百冊近い自分の蔵書を開放し、グレゴーリイに代って少年の読書指南役を買って出る。新たな教師は少年にゴーゴリの『ヂカーニカ近郊夜話』やスマラグドフの『世界史』を勧める。ところが少年は、前者を「嘘ばかり書いてある」がゆえに、また後者を「退屈」であるがゆえに斥けてしまう。グレゴーリイの創世記を用いた、そしてフョードルの開放図書を用いた「寺子屋」教育は共に、この少年には期待された効果を上げずじまいであった。

少年が見据えていたもの

だが「父親」であり「教師」である二人から与えられた情報を、この少年には端(はな)から受け入れる意志も、またその能力もなかったと考えるのは早計であろう。後で見るように(4)、青年スメルジャコフが示す聖書知識の深さと、それを用いての論証の鋭さは驚くべきものがある。恐らく少年はこの時、それらの情報の先をこそ知りたかったのだ。つまり彼が知りたかったのは、創世記の世界創造が告げる二つの「光」よりも更なる始原の「光」であり、ウクライナ農民の猥雑な生活と、その「嘘」に満ちた饒舌な怪奇譚を超えて存在する「真実」であり、また世界が示す気の遠くなるような無限の歴史的事実の先にある「事実」であり「真実」だったのであろう。これら「光」と「真実」と「事実」の究極の真偽と是非を、この若者は端的かつ直ちに知りたかったのであり、創世記やゴーゴリやスマラグドフが延々と説き聴かせる「嘘」やその「退屈さ」に悠長につき合い、耳を傾ける余裕などなかったのだ。二人の父親も息子が真に求めるものを知る由もなく、またそれに応える力もなかったのである。既に少年スメルジャコフの心の眼は、「寺子屋」の教師二人のそれよりも、遥か離れた遠い所を見据えようとしていたと考えるべきであろう。

青年になって

猫の葬式ごっこから、グレゴーリイの「寺子屋」教育へ。そこでの光の始原に関する問答から、癲癇発作の開始へ。そして今度はフョードル自らが率先しての教育へ(三２、６)。これら十二歳前後から十五歳頃までのエピソードの後、筆者が更に進んで報告するのは、恐らく二十歳前後のものと思われる幾つかのエピソードである。それらは前回第１章で既に検討済みであるが、少年時代からの彼の精神史を通観出来るように、改めて簡単に確認しておこう。

まず青年スメルジャコフが示し始めた、食べ物に対する異常とも言えるほどの潔癖さである。このことを知ったフョードルは、彼を直ちに料理修行のためモスクワに派遣するのであった。数年後に帰郷したスメルジャコフについて記されるのは、まずはこの青年の容貌の激変と流行かぶれという外面的な変化だ。だが筆者が読者に注意を促すのは、むしろスメルジャコフの内面的な変化のなさであり、彼の人間嫌いと女嫌いは一貫していたと記される。食べ物に対する脅迫症的な潔癖さが、モスクワでの料理修行後にはどうなったのか、筆者が直接言及することはない。だがそれに代わるかのように、この青年はこれでもかこれでもかとばかりに鞣革の靴を磨き上げ、衣服への気配りも大変なものとなったとされるのである。癲癇発作も以前に増して頻発になったことが報告される。筆者がスメルジャコフの金銭に関する人並外れた潔癖さについて報告することも、ここに付け加えておこう（三６)。

以上が青年スメルジャコフについて、筆者が報告する主なエピソードである。残る二つのエピソードはこの後3と4でそれぞれ取り上げよう。

様々なエピソードが向かうベクトル

本論の視点は、繰り返しとなるが、ドストエフスキイがスメルジャコフを置くのはただ闇の内だけではなく、むしろ闇と光が交錯・分裂する極性の内であり、そこから初めて生まれ出る悲劇的逆説的豊饒性をこそ作者は描こうとしたのではないか、このようなものである。スメルジャコフに関するエピソードのほぼ全てを概観した今、ここで我々は敢えて観念的・独断的になることを恐れず、これらのエピソードが示す意味を探り、改めて作者がこの青年を置く闇と光の交錯・分裂の問題について、後の考察の土台とすべく、簡単ながら解釈を試みておきたい。

潔癖さが映し出すもの

まず青年スメルジャコフが示し始めた極度の潔癖さである。スープに限らず、口に運ぶもの全てをフォークで突き刺し、顕微鏡を覗き込むかのようにじっと見つめ、その末に漸く意を決したかのように呑み込む青年の姿。これは先にも記したように、単なる異常な脅迫症的精神異常の兆候として合理化され、片づけられるべきものではないだろう。ここに認められるのは、何よりもまず痛ましい猜疑心と言うべきものであり、それは運命が彼の

奥深くに刻み込んだ傷の無意識裡の表出として見られるべきものであろう。だが「傷」という言葉を用いたからと言って、我々は二十世紀の心理学がしばしば訴えた「無意識の心理学」、殊にその「傷(トラウマ)の現象学」とも呼ぶべき安易な合理化に頼ろうとする意図はない。スメルジャコフに関する様々なエピソードが指し示すものは、彼の内に刻まれた傷の指摘とその表面的説明で終わるべきものではなく、その傷は更に広く奥深い視野と遠近法の内に捉えられることを要求するものと思われる。

青年が異常とも滑稽とも言うべき潔癖さを露呈することで表現するもの。我々はこれを、地上のありとあらゆるもの一切の清澄透明を疑い、自らその真偽と是非を試みずにはいられない、彼の出生とその後の運命が彼に強いた病的なほどに鋭敏で繊細な感性であり、その感性に根差す悲劇的心理と思考であると考えたい。フォークで突き刺した食べ物をじっと見つめる彼の姿が映し出すものとは、彼の内に刻まれた痛ましい傷であり闇であることは言うまでもない。だが同時にそこから見えて来るものとは、彼の内に傷と闇を刻み込んだ運命、即ち人間と世界と歴史そのものが持つ傷であり闇でもあると考えるべきであろう。スメルジャコフがフョードルは当然のこと、イワンやドミートリイにも冷たい視線を向けるばかりか、祖国ロシアとロシア民衆と外国人をも軽蔑し、更にはグレゴーリイに対しても嘲笑と揶揄を浴びせ続け、受難のイエスに対しても呪詛を投げつけるのは、彼が運命から受けた傷が、そしてその開いた傷口の奥に広がる闇が、容易には説明がつかず納得もゆかぬ、怒りと憎しみと猜疑心とを彼の内に呼び起こしたからに他ならないであろう。

また彼の目は運命を構成する人間と世界とその歴史と、更にはそれら一切を司る神にまで向けられ、自らがそれらの始原と終局を見極めようとの、更には自らがその始原と終局を司ろうとの願望にさえ刺し貫かれていたと考えられる。彼が創世記における光の始原の問題にこだわり続けたのも、光への強い関心と共に、それに劣らず、彼が始原の闇の存在にも強い関心があったからこそであろう。スメルジャコフの内なる闇は、そして彼の心が受けた傷は、容易な合理化も癒しも許さぬものであり、それは人間と世界とその歴史、更にはイエスをも神をも含んだ一切を呑み込む広がりと奥深さを持つ闇と傷だったのだ。ドストエフスキイはスメルジャコフを、このような形而上学的かつ宗教的な広がりと奥行きを持つ普遍的問題性の中に置いたと考えるべきであろう。スメルジャコフが内に宿す闇や傷を覗き込む我々は、逆にそこに我々自身の内なる闇や傷とも出会わされるのだ。

癲癇発作がもたらすもの

光の始原を巡る問題でグレゴーリイの頬打ちを受けた直後から始まり、成長と共にますます頻繁になっていった癲癇発作についてもそうである。我々はこれをただ単に、不幸な生を強いられた若者の精神と肉体の内に生じた病的異変の進行であると捉えるばかりでなく、他ならぬ作者ドストエフスキイ自身が苦しみ、また繰り返し記す彼の発作体験と重ねて考える必要もあるだろう。周知の如く『白痴』のムイシュキン公爵や『悪霊』のキリーロフを通してドストエフスキイが報告するのは、癲癇発作というものが一瞬とは言え人間

に絶対至上の法悦感を与える一方、その発作後にその人間の肉体と精神とは殆ど死の瀬戸際にまで連れ去さられてしまうかのような恐ろしい虚脱感、敢えて言えば虚無感に襲われるという事実である。この事実を繰り返し提示することでドストエフスキイは、人間が如何に戦慄的とも言うべき恐るべき不思議に触れた存在であるかについて、癲癇という病に苦しむ人々やその治療に携わる人々のみならず、広く我々読者に対しても画期的な認識を与えてくれ、この病を我々自身の超越体験と或る程度重ねて考えることの可能性と必要性とを教えてくれたのだ。誤りを恐れず言えば、ドストエフスキイは自らの癲癇体験を、或る程度と言うべきであろうが、我々にも共有させてくれたのである。

癲癇発作に苦しむスメルジャコフ。ここにもまた闇に対する光、存在そのものが宿す絶対肯定性と絶対否定性という、正に形而上学的ともまた宗教的とも言うべき、存在の限界感覚に触れさせられつつあるスメルジャコフがいると我々は考えたい。それはゾシマ長老の言う「神秘的な他界との接触感」（六３Ｇ）と繋がる超越感覚、限界感覚であるとさえ考え得るであろう。我々は最終回の第６章（「研究会便り（１３）」）において、彼が直面していたものを「懼るべき」「活ける神」として考察するであろう。繰り返しとなるが、我々はこの青年が触れさせられていたものを、自分の小さな思考の枠に収めて合理化することの危険性を常に自覚すべきである。

人間嫌いの拠って来たるところ

そしてスメルジャコフの内でますます強まってゆく人間嫌い、殊に女性嫌いという現象。これもまた、ただ単にこの青年の性格一般に還元させてしまうことや、人間と世界への憎悪と復讐心の病的な亢進としてのみ受け取ることでは、彼の内に潜む闇と傷、その人間像全体の十全な解明には繋がらないであろう。むしろ逆にここには、他者との間に絶対至上の信頼関係を築き得るか否かを疑うことを運命づけられた、スメルジャコフの出生に由来する心理と思考の悲劇性が考えられるべきと思われる。この点でスメルジャコフとは、ドストエフスキイ文学が提示し続けてきた「地下室生活者」としても位置づけられるべきであろう。しかもこの存在は絶対孤独の内に自らの忌まわしい運命と向き合い、人間と世界とその歴史、そして「神の子」イエスにさえ痛烈な呪詛を投げ返す「叛逆者」である点、イワンと共に「ロシアの小僧っ子」を逆さ向きに映し出す「地下室生活者」として捉えられるべきであろう。

あるいは我々はここに、この存在が孤児として人々から愛され、かつ畏怖もされた宗教的痴愚の母親スメルジャシチャヤから受け継いだ、稀有とも言うべき純粋さ、あるいは孤高の精神の反映を読み取ることも決して不可能ではないと思われる。

ドストエフスキイ自身の方向づけ

繰り返しとなるが、次々と様々な衝撃的エピソードを提示する筆者の筆の冴えは、ともすれば我々読者に病的性格異常者としてのスメルジャコフ像のみを強く印象づけてしまい、

この青年の出生と運命の悲劇性、そしてその後彼の内から噴き出てくる悪魔性について広い視野の内に捉えることを忘れさせ、彼の内で動きつつある、形而上学的とも宗教的とも言うべき闇と光の交錯のドラマと、そこから初めて生まれ出もする逆説的豊饒性を見失わせてしまう恐れがあることも事実なのだ。その結果我々読者は、作者ドストエフスキイが示そうとする「大きな物語」を見失い、安易な合理化による極めて「小さな物語」の内にスメルジャコフを閉じ込めてしまう危険が少なからずあるのだ。

だがドストエフスキイ自身、この危険性を察知したかのように、我々読者に二つのエピソードを示すことで、スメルジャコフが最終的に何処に向かうかを指し示すのである。それは我々が考えてきたスメルジャコフ像と、ほぼ一致する方向と思われる。

3. 「観照者（サゼルツァーチェリ）」スメルジャコフ　― 蓄えられた「印象」とその爆発の時 ―

悲劇性と悪魔性が向かう先

呪われた忌まわしい出生と、運命の理不尽さと醜悪さに対する怒りと呪い、そして悲しみと孤独を抱え、一人片隅から世に白い眼を向けつつ成長していったスメルジャコフ。この存在に関する様々なエピソードが向かうベクトルについて、つまりその悲劇性と悪魔性が究極どこに行き着くかについて読者に明示すべく、ドストエフスキイが提示したと思われる二つのエピソードの内、まず検討すべきは「観照者」スメルジャコフについてである。

「観照者」

筆者は青年スメルジャコフが、よく庭や通りで立ち止まっては「物思いに沈み」、そのまま十分ほど佇んでいたと記す。この青年の異様とも言うべき「物思い（ザドゥームチヴァスチ）」の姿は、「思考（ドゥーマ）」や「思索（ムイスリ）」と言うよりは「観照（サゼルツァーニエ）」であったとされ、そこにロシアの有名な画家クラムスコイ（1837－87）が描いた傑作「観照者（サゼルツァーチェリ）」が重ねられるのである。

> 「それは冬の森を描いた絵で、森の中の道で、この上なく淋しい場所に迷い込んだ百姓が、ボロの百姓外套に木皮の靴を身に着け、一人ぽつんと立って何やら物思いに耽っているようなのだが、彼は考えているのではなく、ただ何かを《観照》しているのである。［中略］。彼は自分が観照している間に受けた印象を、恐らく自分の内に秘め隠すのであろう。しかもこの印象は彼にとって貴重なものであり、恐らく彼はそれらを密かに、無意識の裡にさえ積み重ねてゆくのだ ―― 何のため、何故なのか、勿論知りはしない。長い年月をかけて印象を積み重ね、ことによると放浪と魂の救済のため突然一切を放棄してエルサレムへと出かけて行ったり、またことによると突然故郷の村を焼き払ったりすることもあろう。いや場合によってはその両方が一度に起こるということもあり得るだろう。観照者は民衆

の間には相当多い。そして恐らくスメルジャコフもまたそのような観照者の一人で、自分でもなぜかは未だ殆ど分からぬままに、恐らく印象を貪るように蓄積していたのであろう」（三６）

「観照者」スメルジャコフが「物思い」と共にその内に次第しだいに蓄積させていった「印象」。それらが極限にまで煮詰められ、やがて突然爆発する時と方向について、ドストエフスキイはここで筆者に予言的に明示させていると考えられる。つまり作者ドストエフスキイは筆者に、今まで様々に提示したスメルジャコフについてのエピソードと、その様々な解釈の可能性をここで「観照者」と「印象」という二語に凝縮させて封印させ、スメルジャコフが新たな運命に向かう時とその方向との二つを、はっきりと指し示させていると考えられるのだ。

「印象」が凝集する時

指し示される時の一つとは、イワンがモスクワで積み重ねた「思考」や「思索」の結晶、「一切が許されている」とする「地質学的変動」の人神思想がスメルジャコフの心を捉え、長い「観照」生活によって蓄積された様々な「印象」を一気に引火点に達しさせる時である。スメルジャコフは「突然故郷の村を焼き払い」、父親フョードルの脳天を叩き割るであろう。もう一つは、彼が「放浪と魂の救済のため突然一切を放棄する」時であり、その向かう先は「エルサレム」である。つまり己の出自と運命一切の破壊と、一切を放棄して魂の救済を求める「エルサレム」への旅立ち。スメルジャコフが向かう新たな運命の時と方向とが二つ、共に「突然」という副詞を以って指し示されたのである。

だが注意すべきことは、筆者がこれら二つの出来事が別々にというよりは、表裏一体の形で訪れる可能性について記していることだ。「いや場合によってはその両方が一度に起こるということもあり得るだろう」。これから見てゆくように、スメルジャコフをして「観照者」であることに終止符を打たせるのは、異母兄弟イワンとの出会いという決定的な出来事であり、その先に待つのは「父親殺し」という、これもまた恐るべき出来事である。イワンとの出会いを契機として、「観照者」スメルジャコフが実際に如何なる新しい道を歩み始めるのか、我々は筆者の指示を念頭に置き、最大限の注意を以って見つめてゆこう。

聖書的終末論的磁場

注意すべきは「観照者」が向かうであろう新たな運命の時と方向が、「放浪と魂の救済」や「突然一切を放棄する」、更には「エルサレム」への旅立ちのように、聖書的なあるいはロシア的な終末論的色彩を帯びた、極めて宗教的象徴性の強い筆致で描き出されていることだ。前回から我々は、作者ドストエフスキイがスメルジャコフの思考と行動を極めて濃密な聖書的磁場の内に置き、この存在に他のどの登場人物にも劣らぬほど形而上学的宗教的ベクトルを帯びさせていることを確認してきた。つまり作者はこの青年を聖と俗の

「二重構造（ヴェルテップ）」の視野の下に捉え、その悲劇的かつ悪魔的な運命のドラマを追おうとしていると考えられるのだ。

ここでグレゴーリイの「寺子屋」教育をもう一度思い出そう。教師グレゴーリイを全くの困惑と怒り心頭に発するまで追いやった少年スメルジャコフ。彼が示したのは、天地創造物語が含む矛盾を指摘して光の真の始原を問うという、鋭利な哲学者かつ宗教思想家としての天稟であったと言えよう。また神から与えられた「初子」への祝福を意味する「母の胎を開く」という聖句。これを用いたグレゴーリイの叱責を、意図的に歪めてマリアに伝える青年スメルジャコフとは、この後で見るように、フョードルが「ジェズイット」と断じる狡猾な宗教的詭弁家としてのスメルジャコフでもある。更にマリアを相手に語った己の運命への痛烈な呪詛。我々はそれが旧約のヨブの叫びを踏まえ、福音書のイエスに対して吐きかけられた唾であり、神に向かって翻された「叛旗」であると考えた。ここにいるのはゾシマ長老やアリョーシャと逆射影的に対応する、深い宗教的闇を生きるユダ・スメルジャコフに他ならない。

一切の破壊と、魂の救済を求めてのエルサレムへの旅立ち。作者ドストエフスキイが「観照者」スメルジャコフに向かわせようとする方向とは超越的方向であり、この青年は深い宗教的・聖書的磁場の内に置かれていることを、改めてここに確認しよう。なお作者はこの「観照者」スメルジャコフについての言及に正面から応える存在として、「実行的な愛」の人アリョーシャを前面に打ち出すのだが、彼については第４章から第６章までの後半（「研究会便り（１１）～（１３）」）で正面から扱おう。

異母兄弟の「出会い」

さて「観照者」スメルジャコフについての考察に続き、我々が向かうべきはスメルジャコフとイワンとの出会いである。作者ドストエフスキイはこれら異母兄弟の出会いを、スメルジャコフにとってばかりか、イワンの運命にとっても決定的な出発点とさせるであろう。スメルジャコフがこれから辿る大きな道筋については既に見た。イワンについてはどうか。我々は彼が、モスクワで積み重ねた「思考」や「思索」の一切を携え、家畜追込町の現実の中に踏み出すのを見るのだが、そこにはスメルジャコフとの出会いが大きな役割を占めるであろう。モスクワから家畜追込町へとやってきた人々が、この町で如何なる人々と出会い、如何なるドラマを展開するのか、ここに『カラマーゾフの兄弟』を構成する基本的な枠組みを設定した作者ドストエフスキイは、イワンとスメルジャコフ二人の出会いにもまた、極めて重要な意味を持たせるのである。

注意すべきはドストエフスキイが、二人の出会いを「出会い」と「交流」と「対決」という三つの段階に分けて描いていることである。二人の出会いと交流に続き、父親殺害後の三度にわたる対決が如何に展開したか、既に第１章（2）で見たように、これは『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスであり、我々も次回第３章以降でなお繰り返し検討してゆかねばならない。今回はこの対決に至るまで、専ら二人の出会いと交流の二つに焦

点を絞りたい。二人の兄弟が出会って以降、それぞれが如何なる感情の起伏を体験し、フョードル殺しに向けて歩を進めたのか、このプロセスは作品の中でも容易には捉え難い。テキストの各所に散在する情報を集めて組み立て直し、この二人の出会いから交流のドラマを浮かび上がらせるよう試みてみよう。

以下ではまず、カラマーゾフ家の夕食の場でスメルジャコフが「バラムの驢馬」の如く突如口を開き、育ての親グレゴーリイを揶揄する形で、キリスト教の「棄教者」について語るエピソードを取り上げよう。作品構成上からも、このスメルジャコフの棄教者論は、その日の「場違いな会合」においてイワンが語った破門者論と呼応するものと考えられる。イワンはゾシマ長老に対して、一方スメルジャコフはイワンに対して、それぞれの内に蓄えてきた思想をぶつけるというパラレルな構図がここに浮かび上がるであろう。またこれら二人の兄弟の在り方を、殊にスメルジャコフの棄教者論を独自の切り口で裁断するのがフョードルである。ドストエフスキイはこのフョードルを介しても、二人の異母兄弟の交流と、スメルジャコフの内なる現実を浮かび上がらせるであろう。

4. スメルジャコフの棄教者論　― イワンを向こうに置いて ―

バラムの驢馬.

「場違いな会合」から帰った後、フョードルの屋敷では夕食も終わり、皆が寛ぎの気分に領されていた（三７）。ここに下男グレゴーリイが町で仕入れてきた土産話を披露する。遠いアジアの国境で異教徒に捕えられ、キリスト教からの改宗を迫られたものの拒絶し、拷問の末に殉教の死を遂げたロシア兵士の話である。敬虔な信の人グレゴーリイ好みの土産話だ。すると突如スメルジャコフが薄笑いを浮かべる。これに気づいたフョードルが水を向けるや、スメルジャコフは日頃の寡黙さとは裏腹に、「突如」「大きな声で」語り始める。筆者は「バラムの驢馬」（民数記二十二 21-35）が口を開いたと記すのだが、スメルジャコフの語る内容は、フョードルから「詭弁家（カズイスト）」とも「宗教的詭弁家（ジェズイット）」とも呼ばれるほどに屈折し、容易には真意を掴み難い。またこの「バラムの驢馬」が果たして誰に向かって語りかけていたのか、これもまた容易には捉え難い。彼の話は、キリスト教信仰を貫いて死んだロシア兵士に感動したグレゴーリイの信仰心を執拗に揶揄する形で展開するのだが、彼が直接語りかける相手はグレゴーリイではなく、家の主人フョードルのようである。ところがフョードルその人は、スメルジャコフが相手にしているのは実はイワンだと指摘するのだ。これを受ける形で筆者も、事実この時イワンが「真面目に」しかも「大変な好奇心」を以って耳を傾けていたと重ねて記す。これらフョードルの判断と筆者の指摘を考え合わせる時、ここでスメルジャコフが向かっている真の相手は、やはりイワンだと考えるべきであろう。この複雑で曖昧な語りそのものの内には、何よりも雄弁にスメルジャコフその人の内実が反映され、殊にイワンに対するスメルジャコフのメッセージが潜むと考えられ

る。我々はしばらく「バラムの驢馬」スメルジャコフの「雄弁」に耳を傾けることにして、その「雄弁」あるいは「詭弁」が含むメッセージについては、後で考えることにしよう。なお「バラムの驢馬」であるが、このエピソードが旧約聖書の民数記の中で持つ意味と、この作品における象徴性とについては、本論の最終回第６章で考察することにしたい。

「棄教」とは、いつなされるのか

沈黙を破った「バラムの驢馬」、スメルジャコフの話のポイントはこうだ ―― 異教徒の拷問によって脅されたキリスト教徒が、たとえもし棄教したとしても、彼は罪に問われることはないであろう。なぜならばキリスト教徒が迫害者に向かって、「神の名を呪い」「神聖なる洗礼を否定」するや否や、そのキリスト教徒は直ちに「至高の神の裁き」によって「呪われた破門者」とされ、「神聖なる教会から追放されて」しまい、キリストとも教会とも無縁の者となるのだから。否、この「棄教」と「破門」は、神の否定を口にするどころか、口に出そうと「考えるや否や」、正にその瞬間に既に成就しているのだ。この瞬間、この人間はキリストとはもう完全に無縁のものとされ、キリスト教徒の資格も責任も剥奪されてしまっているのだから。その後で、この人間が「キリストを棄てる」などということが、どうしてあり得えようか。

「棄教」あるいは「破門」を巡りスメルジャコフが焦点を絞るのは、人間が神信仰を保つギリギリの境界線についてであり、結局棄教はいつなされ、その罪はいつ発生するかの問題であると言えよう。だがこの問題は措いて、何よりも注目すべきは、スメルジャコフの論調を支配する冷笑的姿勢（シニシズム）の一方で、同時に彼の論調が持つ真剣さと徹底性（ラディカリズム）である。再度の確認となるが、彼が強調するのは、キリスト教徒が自らの信仰を否定しようと「考えるや否や」「その瞬間」、既に彼は神からもキリストからも切り離された存在となり、「聖なるもの」とは完全に無縁の存在とされてしまうという点である。これら「するや否や」「その瞬間」という言葉を用いる彼の思考のラディカルさと真剣さ。その一方でグレゴーリイの敬虔なキリスト教信仰に対するシニカルで執拗な揶揄。フョードルがスメルジャコフを「詭弁家（カズイスト）」とも「宗教的詭弁家（ジェズイット）」とも呼び、イワンが「真面目に」しかも「大変な好奇心」を以って彼の言葉に耳を傾けていた理由は、棄教者論を展開するスメルジャコフが発する、この捉え難い両極性（アムビヴァレンス）にあると言えるであろう。彼の真意は果たして何処にあるのか、誰も確かには掴み得なかったのだ。

そしてこのことは、我々が今までスメルジャコフの内に見出してきた在り方ともそのまま響き合うものと言えよう。つまり猫を自ら殺害した上で、その猫の葬式を執り行い、鎮魂の哀歌までうたうという恐るべき分裂に心を引き裂かれた少年。癲癇発作により、人間存在が持ち得る究極の「肯定と否定」の限界感覚を絶えず体験させられている若者。食物を始め、ありとあらゆる存在の清澄透明を疑い、自らその真偽と是非を試みずにはいない若者。このような形而上学的とも宗教的とも言うべき、解き難い闇と光の対立と交錯・混沌を内に宿すスメルジャコフの姿とは、運命が彼に刻印した分裂、容易には克服し難い悲

劇的両極性を映し出すものと考えられるのだが、これは棄教者論を展開する彼が与える曖昧で捉え難い両極性とも、恐らくは負の方向で、響き合うものと考えられるのである。

フョードルの問い

イワンに向けて発されたスメルジャコフの棄教者論。だがこれに直接激しい反応を返すのはフョードルだ。彼は突如口を開いた「バラムの驢馬」に向かい、続けて二つの鋭利な問いを発する。ここにはスメルジャコフの棄教者論が持つ真剣さといかがわしさ、要するにその曖昧な両極性についての、フョードルならではの鋭くユニークな洞察が見出されると同時に、信仰に関する彼自身の心の疼きもまた垣間見られるであろう。

フョードルが問う―― お前が言うように、キリスト教徒が心の中で信仰を棄てた瞬間、神から呪われた破門者となってしまうとするならば、その破門者はどうなるのか？ つまり今や神ともキリストとも無縁となった彼は、果たして如何なる罪に問われるのか？ これに対してスメルジャコフは、直接はフョードルにではなく、またもわざとグレゴーリイに向かい、嘲笑的な口調で延々と答えを返すのであった ―― 格別の罪などありはしない。たとえあるとしても、ごく普通の罪のはずである。と言うのも、聖書に書いてあるような信仰を持つ人間など存在しないのだから。「誠(まこと)に汝(なんぢ)らに告(つ)ぐ、もし芥種(からしだねひとつぶ)一粒ほどの信仰(しんかう)あらば、この山(やま)に《此処(ここ)より彼処(かしこ)に移(うつ)れ》と言(い)ふとも移(うつ)らん」（マタイ十七 20）。山を海に移すことなど、あなた［グレゴーリイ］にも出来はしないだろう。海にどころか、庭の裏を流れる悪臭芬々たる溝(どぶ)川にさえ移せないであろう。現代ではこのような真の信仰を持つ者などいはしないのだ。尤も地上全体では一人か、多くて二人くらいはいるかもしれない。たとえそうだとしても、見つかるはずがない。その人物は何処かエジプトの砂漠あたりで密かに修業をしているだろうから。かくして慈悲深き神様が、このような我らを誰一人赦して下さらぬようなことが、どうしてあり得ようか？ 「罪」の出る余地はないのだ。

注意すべきことだが、スメルジャコフはフョードルが投げかけた問いに正面から答えてはいない。フョードルが彼にぶつけたのは、心の中でその信仰を棄てた瞬間、神から呪われた破門者となってしまった人間、この棄教者・破門者のその後の運命は果たしてどうなるのか、信仰を棄てた罪はどうなるのかという、 恐らくは日頃フョードル自身の心の底で疼き続ける問題だったのだ。だがスメルジャコフによれば、神が正面からその罪と罰を問題とするような真の信仰も信仰者も、まずこの地上には存在しないというのである。

信仰者の棄教という問題を論じながら、またその棄教者の罪の問題について問い返されながら、スメルジャコフが口にするのは、この地上に真の信仰も信仰者もまず存在しない、罪もあり得ないという、自身の棄教者論の前提そのものを無とするような議論である。ここにいるのは信仰の問題について自分自身の内心は明かさず、福音書さえ自家薬籠中の道具として用い、信と不信の両極を手玉に取って操り、相手を幻惑する「ジェズイット」スメルジャコフに他ならない。

「ロシア的信仰」

興味深いことにフョードルは、スメルジャコフが自分の問いに直接答えなかったことを咎めない。育ての親グレゴーリイに対する反抗を始めとして、日頃のスメルジャコフの言動をよく知るフョードルには、この青年が人間の持つ信仰心について、絶対の肯定とも絶対の否定ともつかぬ立場から、またも曖昧で嘲笑的な言葉を繰り出すことは、既に十分に予想済みのことだったのであろう。だがフョードルはこの時、スメルジャコフが真の信仰者が地上に存在する可能性を認めたこと、この一点だけには狂喜し、この事実に飛びついてゆく。たとえ「何処かエジプトの砂漠あたり」でも、また「一人か、多くて二人くらい」でも、この世界には「山を動かすことの出来る人間」がいる。マタイ福音書を用いたスメルジャコフの論証に有頂天となったフョードルは「金切り声」さえ上げる。「イワン、覚えておけ、書き留めておけ。ここにロシア人が現われ出たぞ！」。フョードルは、これこそ「ロシア的信仰」に他ならぬことをイワンに認めさせ、更にはアリョーシャにも念を押すのであった。事実スメルジャコフのマタイ福音書への言及からは、イエスやその他ごく少数の、信仰の「ダイヤモンド」（イワン、十９）たちを凝視するスメルジャコフの姿が浮かんでくることは否定出来ないであろう。だがスメルジャコフが内に秘める信仰心の「尻尾を掴んだ」かのようなフョードルのこの有頂天ぶりは、スメルジャコフの信仰心を見出した歓喜というよりも、彼自身の信の問題、肯定と否定の間に揺れる心の反映と見るべきであろう。

「ロシア的信仰」。フョードルはこの日「場違いな会合」において、ゾシマ長老を相手に福音書を用いて執拗に道化を演じ、長老から「嘘をつくこと」をたしなめられ、果てにはキリスト教会を否定し去って帰ったのであった（二８）。修道院で「崖から飛び降りる」大醜聞を演じた瀆神的道化の心の底には、なお「永遠への希求」が蠢いていたのだ。その内に流れる「宗教的痴愚」たるカラマーゾフの血が、同じ夜スメルジャコフの棄教者論に触れ、一瞬また呼び覚まされたのであろう。作品の冒頭近く、修道院での修行生活に入ろうとするアリョーシャに、フョードルはこう語る。「俺はいつも考えてきた。一体誰が俺のために祈ってくれるのか？ そんな物好きがこの世にいるのか？」（一４）。更に彼は息子に対し、自らの内なるニヒリズムを告白し、こうも語る。「向こうで真理に至るまで信仰を極めたら、話をしに帰ってこい」「お前がこの地上で、俺を裁くことのなかった唯一の人間だ」（同上）。この男もまたスメルジャコフと同じく、あるいはそれ以上に聖書に通じ、信と不信を手玉に取る瀆神的「道化」であると同時に、スメルジャコフとは異なり、なお信と不信の間で揺れ、心を痛めもする「ロシアの小僧っ子」なのだ。（フョードルの信と不信の問題、そしてニヒリズムと表裏一体にある逆説的宗教的豊饒さについては、「研究会便り（４）― 道化フョードルの聖書 ―」を参照されたい）。

フョードルのもう一つの問い

さてフョードルはこの後更にもう一つ、スメルジャコフに対してこの上なく厳しく鋭利な問いを投げつける。「ところでお前が迫害者の前で棄教した時とは、お前には信仰以外に

何も考えることがないような時、つまり正に自分の信仰を証する必要がある時ではなかったか！ え、おい、これは罪になるのではないか？」（三７）。スメルジャコフの詭弁によって一瞬でも「ロシア的信仰」を呼び覚まされたフョードルは、信仰者の棄教を論じるスメルジャコフの詭弁、その論理的矛盾を暴きにかかったと言えよう。

つまり彼は改めてスメルジャコフに問い返したのだ ―― お前はキリスト教徒が自らの信仰を否定しようと「考えるや否や」「その瞬間」云々と言う。だが「その瞬間」に至る「前」はどうだったのだ。それはお前が「信仰以外に何も考えることがないような」、紛れもないキリスト教徒だった時であろう。そうであるならば、お前にはたとえ迫害・拷問が如何に熾烈なものであろうとも、迫害者の前でその信仰を棄てるような「瞬間」が到来することなどあり得ず、立派に「自分の信仰を証する」はずではなかったか。それなのに「棄ててしまった」というのならば、お前は一線を超えて、立派な「罪」を犯したということになるのではないか。

この問いを投げつけた時のフョードルとは、スメルジャコフに劣らぬ「ジェズイット」であり、また同時に人間が神への信仰を失う時、否、信仰を棄てる時、即ちこの聖なる「一線の踏み越え」が如何に重大かつ恐るべき「罪」となるかを痛感する「ロシアの小僧っ子」だったのである。

これに対するスメルジャコフの答えは、またも曖昧な「ジェズイット」的両極性の内に展開する。彼は言う ―― そのような［信仰の絶対的危機の］時、もし自分が真の信仰者であり、その信仰を否定するならば、確かに「罪」となるであろう。しかしもし自分に真の信仰があるならば、山に命じて迫害者たちを押しつぶしてしまうだろう。ところが自分が山に命じても動かないとしたら、疑いを抱かざるを得ないであろう。そうでなくとも自分は完全には天国に行き着くことなど出来ないことが分かっているのに、なぜ迫害を受けねばならないのか云々、云々。

議論が終わる。それまで陽気だったフョードルは急に不機嫌になり、スメルジャコフとグレゴーリイは部屋から追い出される。「もし自分が真の信仰者であり、その信仰を否定するならば」「もし自分が真の信仰者であるならば」「自分が山に命じても動かないとしたら」 ―― スメルジャコフが操るのは、自らの立場を巧妙に隠す「ジェズイット」的仮定法であり、フョードルはこの青年の饒舌が、結局は彼が「ロシア的信仰」から遠く離れた存在であることを告げる論証以外の何物でもないことをはっきりと知ったのだ。彼が最終的にスメルジャコフの内に見出したもの、それは「ジェズイット」的詭弁と饒舌であり、「ロシア的信仰」を口にはするものの、実際には信仰のリアリティに触れてはいず、それからは遠く離れて凍てついた魂だったのである。フョードルを不機嫌にさせたもの、それは皮肉にも、彼が自らの放蕩生活の一齣として世に送り出した私生児のスメルジャコフの荒涼たる心の現実であり、この息子ばかりか自分自身もまた「ロシア的信仰」から遠く離れた荒涼たる現実を生きていることを思い知らされたのだ（※）。この苦い覚醒を我々は記憶に留めて置かねばならない。この延長線上にあるのが、スメルジャコフによるフョードル殺し

の悲劇なのだ。息子は父を殺して初めて、その良心に臨む裁きの神に触れさせられるであろう。この作品のエピグラフに置かれた「一粒の麦」の死の逆説である（ヨハネ十二 24)。なおこの罪人の良心に臨む懼るべき「悪業への懲罰（カラ）」（ゾシマ長老、二５）が、第３章（「研究会便り（１０)」）以下の主要テーマの一つとなるであろう（第３章4、第４章5、第６章4等)。

※（これと関連してフョードルとイワンを貫く「嘘」、ニヒリズムの問題については、先の「究会便り（４）― 道化フョードルの聖書 ―」を参照。ヨハネ福音書でイエスが語る悪魔の「嘘」、更にゾシマ長老が語るフョードルの「嘘」、これらとの関係で、カラマーゾフ家の「悪魔の系譜」、フョードルとイワンのニヒリズムについて考察したものである）

「神と不死」の問い

スメルジャコフとグレゴーリイが部屋から追い出された直後のことである。フョードルはアリョーシャとイワンとを前に置き、「口直し」をしようとするかのように、改めて「神と不死」の問題を持ち出す。「イワン、信じるか。このことが俺の心を引き裂いているのだ」。そして彼は二人の息子に正面から問いかける。「神はあるのか、ないのか？」。「不死はあるのか、ないのか？」。予想通り、これらの問いに対するそれぞれの答えは「肯定（イエス）と否定（ノー）」であった。「神」も「不死」も否定し、一切が「無」であると断言するイワンの答えが真実に近いと感じるものの、フョードルの心は満たされない。「こんな［「神と不死」という］夢想（メチター）に対して、人間はどれだけの信仰とどれだけの精力を無駄に捧げてきたというのだ。しかもこれは何千年にもわたってのことなのだ！ いったい誰がこんなに人間を愚弄しているのだ、イワン？」。イワンから再び神も悪魔も存在しないと突き放され、フョードルは言う。「残念だ。畜生、そうだとしたら、最初に神を考えついた奴を俺は一体どうしてやったらいいのだ！ ヤマナラシの木で縛り首にしても足らんくらいだ」。

繰り返しとなるがフョードルもまた、息子たちと同じく「ロシア的信仰」の血、カラマーゾフの「宗教的痴愚」の血を内に宿し、「神と不死」を巡る問いから逃れることの出来ない「ロシアの小僧っ子」なのだ。信仰の問題を巡ってスメルジャコフとフョードル、そしてイワンとアリョーシャ、それぞれの異なる姿勢を描き分けるドストエフスキイの複眼的思考が鮮やかに浮かび上がる。その複眼に映し出されたスメルジャコフとは、人間が信仰心を持つことを容易には認めようとはしないスメルジャコフであり、我々が第 1 章から追いかけている理不尽で醜悪な運命に傷つけられたスメルジャコフ、地上のありとあらゆるもの一切の清澄透明を疑い、自らその真偽と是非を試みずにはいられないスメルジャコフであることを確認しよう。その彼が現実に対して新たに決定的一歩を踏み出すのは、モスクワから帰京した異母兄弟のイワンと出会うことによってである。

5. イワンとの出会いと交流（１）　ー 人神思想の衝撃と受容 ー

「場違いな会合」

カラマーゾフ家の夕食後、突如語り出されたスメルジャコフの「棄教者論」。思い起こすべきは、その日の昼食時を挟んで、修道院のゾシマ長老の許では「場違いな会合」が開かれていたという事実である。この会合のピークの一つはイワンが展開する「教会裁判論」批判であり、その中心テーマとはいわば「破門者論」とも呼ぶべきものだ。そしてスメルジャコフの棄教者論とは、明らかにこのイワンの破門者論と呼応するものである。スメルジャコフは「場違いな会合」に出てはいない。恐らくそこでイワンが語ったことを知ることはなかったのだ。そうであるからこそ両論の呼応は、二人の出会いと交流という背景を何よりも雄弁に物語る事実と考えるべきであろう。ここにあるのはドストエフスキイの周到な作品構成である。

既に見たように、この「場違いな会合」を密かに設定したのはイワンである。モスクワにおけるイワンの精神史は次回第３章で概観するが、神と「キリストの愛」を葬り去り、「地質学的変動」で完成を見た人神思想、その真理性と現実性を証すべくイワンは帰郷したのだ。そして彼が訪れた修道院の中心に座すのは、ロシア全土から崇拝者たちを集めるゾシマ長老であった。弟のアリョーシャも命を預け、既に一年間にわたりその下で修業を続けるゾシマ長老、ひたすら「キリストの御姿」を守り続けるこの聖者との対決を、イワンが既に帰京前から目論んでいたかどうかは不明である。だが遅かれ早かれイワンが、この長老との対決を計るのは不可避のことであったろう。

「教会裁判論」批判

修道院に押しかけた婦人たちの悩みに耳を傾け、慰めと助言を与えたゾシマ長老がようやく庵室に戻った時、そこでは既に熱い議論が繰り広げられていた。ある聖職者が公にした「教会裁判論」に対して、イワンがある新聞に投稿した批判を巡っての議論である。この議論については以前検討してあるが（「研究会便り（７）」イワン（三）、「ユダ」イワンの帰郷と挫折）、スメルジャコフとイワンとの結びつきを確認するため、また彼らの思索の核心を理解するために、ここでもう一度確認しておこう。

人が犯した罪を裁く力と、その罪を最終的に赦し清算する力はどこにあるのか。イワンと彼の議論相手の神父たちは、その力が最終的には国家ではなく教会に属するとする点では一致していた。「神と不死」を否定するニヒリストであるとされるイワンが、この論文では教会の至上の裁判権を認めている。イォシフ神父たちはここに何か素直には受け取り難いもの、「両極に取り得る」曖昧さを感じていた。曖昧な両極性。フョードルからスメルジャコフ、そしてイワンを貫くカラマーゾフ家の「ジェズイット」の系譜である。

事実、神父たちの危惧は当を得たものであった。イワンは、罪人に対する裁きの至上権

を教会のものとはするものの、決して単純な教会讃美論を展開しているわけではなかった。それどころか彼の論議には恐るべき毒が隠されていたのである。彼は問う。もし教会が至上の裁判権を持つに至った暁には、教会によって裁かれた人々、つまり「破門された人々は、どこへ行けばよいのでしょうか？」「破門者たちは、現在のように人間社会からばかりでなく、キリストからも離れなければならないではありませんか」。裁きの至上権を認められた「キリストの教会」が陥り得る決定的な矛盾・陥穽について、イワンは一つの疑問を提示した、というよりは痛烈な毒矢を放ったのだ。

「破門された人々」は「キリストからも離れて」、どこへ行き得るのか。この問いの背後には破門者にじっと眼を注ぎ、その持ち得る意味と可能性について思索するイワンがいる。「教会裁判論」批判を展開するイワンとは、「大審問官」の劇詩で至った「キリストの愛」の否定を更に先に超え出て、破門者が究極行き着く「人神」の可能性について思いを馳せる「ロシアの小僧っ子」、今や「地質学的変動」の思想家へと変貌したイワンなのだ。

この破門者論は、そのままスメルジャコフの棄教者論と呼応するものである。キリスト教徒が自らの信仰を否定しようと「考えるや否や」「その瞬間」、既に彼は神からもキリストからも切り離された存在となり、「聖なるもの」とは完全に無縁の存在、つまり棄教者となり破門者となってしまう。このスメルジャコフの棄教者論とイワンの破門者論において、二人が展開する論理の方向と目指すものとは全く同じなのだ。

良心の闇取引、教会破門論

イワンとスメルジャコフ。二人の思想的類似性を更に明らかにするために、我々はゾシマ長老の前でイワンが論じる「良心の闇取引」についても見ておこう。イワンの「教会裁判論」批判がキリスト教会に対する如何に激しい弾劾と挑戦、否定の毒を隠し持つものであるかが、ここに改めて確認出来るであろう。

イワンの説くところはこうだ。現代においては、罪人を裁く主体は教会ではなく国家である。この現状の下では、罪人たちの良心は自分自身と「闇取引」をすることが可能だ。つまりたとえ罪を犯した人間が国家から裁かれたとしても、その罪人は自分がまだ教会から裁かれたわけでも離れたわけでもない、「キリストの敵」となってしまったわけではないと考え、密かにその良心を鎮めることが可能なのだ。良心の「闇取引」である。ところが、とイワンは続ける、教会が国家の代わりに裁判を司るようになった暁には、罪人の良心がなおこのような「闇取引」をすることが可能であろうか。教会によって裁かれ、教会によって破門された人間は「キリストからも離れ去らなければならない」。彼には最早どこにも行き場がなくなるのだ。「キリストの愛」から見放され、それどころか「キリストの敵」となってしまった人間がこの世に一人孤立したまま、なお自分を唯一正しい「キリストの教会」として立ち続けることなど果たして可能であろうか。たとえ可能だとしても、そこには「膨大な条件、特殊な環境が必要とされるであろう」。

一見するとイワンの言うところは、教会から破門された罪人たちの運命を心から気遣う

問いのように見える。だがこの問いが隠し持つものは毒であり、教会への激しい挑戦状、ないしは絶縁状と言うべきものだ。と言うのもイワンの論旨を裏返して突き詰めればどうなるのか。至上の裁判権を持つに至った教会から「キリストの愛」を取り上げられ、「キリストの敵」として締め出されてしまった罪人。だがこの最早どこにも行き場のない罪人は、もし「膨大な条件、特殊な環境」が満たされさえすれば、教会からもキリストからも神からも解き放たれ、この世に一人毅然と立ち、自らの足で歩むことが可能となるのではないか。その「膨大な条件、特殊な環境」にしても、別に大がかりな「地質学的変動」が必要とされる訳ではあるまい。そこに必要な条件とはただ一つ、犯罪者がその内に宿す「良心」を、つまり教会との接触だけは保とうと「闇取引」に縋っていた奴隷的な良心を根絶させてしまいさえすればよいのだ。良心と縁を切り「キリストと離れた」彼の心には、最早「神という観念」の居場所もなく、「不道徳」とか「犯罪」とかいう観念さえ存在する余地もなくなるであろう。善悪を離れた彼には、「一切が許されている」のだ。

これは「人間が七千年の習慣によって作り出した良心」を棄て去り、「神という観念」自体を抹消し、人間が神となるという「地質学的変動」の思想に他ならない（十一９、１０）。イワンはゾシマ長老の前で、モスクワで積み重ねたその思想の全重量を叩きつけているのだ。ゾシマ長老に対して表面上は謙虚な姿勢を貫きながら、イワンの論証を貫くものは徹底的な弾劾と否定の毒を隠し持つ教会批判、いやそれどころかイワンの側からの教会への決別宣言、教会破門論とも言うべきものである。（イワンの「教会裁判論」批判と、彼のゾシマ長老との対決については、上述の「研究会便り（７）」と、拙著『カラマーゾフの兄弟論』前編Ｖ５も参照）

破門者論と棄教者論

イワンの破門者論。そしてスメルジャコフの棄教者論。共にキリスト教会から絶縁された人間について説く二人の論理は同一線上にあり、それらが隠し持つ毒とは、神とイエス・キリストの排斥・否定であり、その背後にあるのは「地質学的変動」の人神思想である。フョードルが鋭くも見抜いたように、突如口を開いた「バラムの驢馬」スメルジャコフが見据え、語りかけていた相手とはイワンに他ならなかったのだ —— ほらどうです。若旦那。グレゴーリイ爺さんの土産話を肴に、今私がお話しているのは、ほら正に、あなたがモスクワからお持ちになった、「もし永遠の神がいないならば」「一切が許されている」というあのお気に入りの理論の、私なりの変奏曲なのですよ！

「地質学的変動」の思想

先に見たように、故郷の家畜追込町に乗り込んだイワンが目論んだこととは、彼がモスクワで積み重ねた思索の結晶たる「地質学的変動」の思想の真実性と現実性を証明することであったことは、まず間違いないであろう（十一９、イワンの帰郷の目的については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』前編、第Ｖ章１を参照）。そのために彼が家畜追込町で乗り出したのは、「地質学的変動」の思想の宣布と、弟のアリョーシャが「命」と慕う聖者ゾシマ長老との対決

であったと考えられる。後者は先に見たように、彼自らが仕組んだ「場違いな会合」において実行に移される。「地質学的変動」の思想については、イワンが町の上流階級の婦人たちにその一部を説いていたことが、地主のミウーソフによって暴露される。「人間の中にある不死への信仰を絶滅させてごらんなさい。そうすれば直ちに人間の中にある愛ばかりか、この地上の生活を続けてゆくための一切の生命力も枯渇してしまいますよ」（二５）。春の帰郷以来、イワンは着々と歩みを続けていたのだ。

だがイワンが自分の思想を正面から説いたのは、専らスメルジャコフだったと考えるべきであろう。イワンの思想と出会った感動について、そしてその後の熱い交流について、スメルジャコフ自身、イワンとの三度目で最後の対決の終り近く、その自死の直前に、こう語っているのだ。

> 「[私が父親フョードル殺しに至ったのは]《一切が許されている》と考えたからです。このことは本当にあなたが教えて下さったのですよ。あなたはあの頃色々とお話をして下さいました。というのも、もし永遠の神がいないならば、いかなる善行もありはしない、そもそも善行など何の必要もないのだと。あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」(十一８)

モスクワから人神思想を携え颯爽と家畜追込町に登場したイワン。この若旦那がスメルジャコフにとっては、まばゆいばかりの英雄と見えたばかりか、自分を忌むべき醜悪な運命から解き放つ「救世主」とも見紛うばかりの存在に思われたことが、ここからはまざまざと伝わってくる。「あなたはあの頃色々とお話をして下さいました」。このスメルジャコフの言葉からは、イワンとスメルジャコフとの間で「地質学的変動」の思想の伝授がなされたことも覗われる。若旦那を師とし下男を弟子とする、カラマーゾフ家の新たな「寺子屋」教育が始まったのだ。「あなたは本気でした」。こう言うスメルジャコフ自身、師のイワンを凌ぐ本気さで「地質学的変動」の思想と取り組み、自らの内に吸収していったのであろう。

「寺子屋」の教材、「地質学的変動」

「地質学的変動」の思想。そのほぼ全貌が読者に明らかにされるのは作品の終わり近く、第十一篇でイワンの前に現れた悪魔（チョールト）がその内容を暴露する場面である。以下にその一部を見ておこう（全体は以下を参照。「研究会便り（７）―イワン（二）「キリストの愛」 の否定、ユダ・イワン ―」)。ここで悪魔が語る言葉とは、そのままイワンがスメルジャコフに語り聞かせた言葉であると想像しつつ読むことも可能であろう。新たに始まった「寺子屋」の雰囲気が、実況中継の如き臨場感を以って甦る。

> 「彼らは全てを破壊して人肉を喰うことから始めようと考えている。愚か者どもが。

この俺様に尋ねようともしないで！俺様に言わせれば、何一つ破壊する必要などないのだ。人間の内にある神という観念を根絶させてしまいさえすればよいのだ。仕事に取りかかるべきは正にそこからだ。そこから始めるべきなのだ。ああ、何一つ理解しない盲人どもが！ひとたび人間が一人残らず神を否定しさえすれば(その時は地質学上の時期と並行して必ずや来るに違いない)、その後は人肉など喰わずとも、自ずと旧来のあらゆる世界観や、そして何よりも旧来の道徳観の一切が崩壊し、新しきもの全てが到来するのだ」

「いったい何時、そのような時はやって来るのか。もしその時が到来すれば一切は解決され、人類は最終的な安定を見るであろう。しかし人類に深く根差す愚かさを思えば、恐らく今後まだ千年はその安定の到来はないであろう。それゆえ現在でも既にこの真理を認識している者は誰でも、全く好きなままにこの新しい原理に基づいて安定することが許される。その意味で彼には《一切が許されている》のだ。そればかりか、たとえそういう時期が決して到来しないとしても、いずれにせよ神も不死も存在しないのだから、この新しい人間は、たとえ全世界に一人だけしかいないとしても人神になることが許される。またこの新しい地位に就く以上、必要とあらばかつて奴隷的人間が持ったあらゆる旧来の道徳的限界を平然と踏み越えることも許されるのだ。神には法律など存在しない！神の立つ所、即ちそこが神の座だ！俺の立つ所、それが直ちに至高の座となるのだ・・・《一切が許されている》、これでけりがつくのだ！」（十一９）

「人間の内にある神という観念を根絶させてしまいさえすればよいのだ」。皮肉なことに、人間の内にある「神という観念」、この不思議の前に正面から立ち、「神」を本気で追い求め続けた「ロシアの小僧っ子」イワンの、これが最終的な結論だったのである。

注目すべきことにこの結論に至った経緯を、イワン自身が極めて簡潔にアリョーシャに語る場面が存在する（十一１０）。マリアがもたらしたスメルジャコフ自殺の報を、今度はアリョーシャがイワンに伝えに来た時である。アリョーシャを迎えたのは、半狂乱状態の内にあるイワンであった。スメルジャコフが自殺することを予感しつつ、彼をそこに残して住いに戻ったイワンは、この時に至るまで悪魔との対決を繰り広げていたのである。イワンの完全な人格崩壊は間近だったのだ。怯え切った赤ん坊のようになったイワンが錯乱した意識の中で明かす、モスクワでの思索生活における最大の秘密。悪魔に導かれての、人神思想誕生に関する告白である。

「あいつが俺を誘導したんだ！ それも、狡猾に、狡猾になんだ。

《良心！ 良心とは何だろう？ それは僕が作ったものさ。それなのに、なぜ僕は苦しむのだろう？ 習慣によってなんだ。七千年にわたる、世界中の人間

の習慣によってなんだ。だから、そんな習慣を捨てて、神になろうではないか》

こんな風にあいつが言ったんだ。こんな具合にあいつが言ったんだよ」

（十一１０）

恐らくモスクワのイワンは、自らの内でこのような恐るべき自問自答を繰り返す真摯この上ない思索青年、「神と不死」を追い求める「ロシアの小僧っ子」だったのであろう。その思索の行き着く先が、悪魔に導かれての「地質学的変動」の人神思想だったのだ。彼の破門者論も、そしてスメルジャコフの棄教者論も共に、その根は正にここにある。

「あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」（十一９）。己の出生と運命に対する呪詛をイエスに叩きつけるスメルジャコフは、イエスの「父なる神」も「キリストの愛」も否定し去るイワンの人神思想に、胸の震えと共に聴き入ったのであろう。スメルジャコフが師と仰ぐイワン、そのイワンが師とした悪魔。そして悪魔の「否定の精神」。カラマーゾフ家の新たな「寺子屋」を司る主宰者たちがここに明らかとなる。

6. イワンとの出会いと交流（2）　― 若旦那と下男の「落差」―

出会いの感動

イワンとスメルジャコフ。二人の出会いと交流について、今までは「観照者」から「棄教者論」へと、まずはスメルジャコフの側からのアプローチを試みてきた。今度は二人の出会いと交流の経緯をイワンの側から見てみよう。ともすれば読み飛ばされてしまい兼ねない二人の出会いから交流について、作者ドストエフスキイはイワンから見たスメルジャコフ像についても、少なからぬデータを我々読者に提供し、二人の間にあったドラマの再構成を相当程度可能としているのである。

筆者はイワンが家畜追込町への帰郷の当初、誰よりもまず異母兄弟であり下男であるスメルジャコフに、「特別な興味」を掻き立てられたと記す（五６）。そしてイワンは意図的に、この「一風変わった（アリギナーリヌイ）」人物を自分と話すように仕向けたのである。興味深いことは、イワンとスメルジャコフとの出会いの始めに、我々には既に馴染みとなったあの創世記における光の始原の問題がまたも登場することだ。つまり筆者によれば、この問題が新たにスメルジャコフとイワンとの間で取り上げられたというのである。光の始原あるいは創造に関する疑問は、あのグレゴーリイによる頬打ち事件の後も、スメルジャコフの内になお解けぬ謎として留まり続けていたのであろう。スメルジャコフはこの問題をモスクワからやってきた若旦那イワンにぶつけ、二人はその他の「哲学的問題」も含め様々な問題を語り合ったのである（五６）。

果たしてモスクワでイワンは、自分が故郷の家畜追込町に帰るや、光の始原に関して創

世記が示す矛盾を指摘するような下男かつ異母兄弟と出会うことを想像したであろうか。スメルジャコフはスメルジャコフで、グレゴーリイの「寺子屋」教育以来、心の底に埋もれさせていた問題を正面から論じ合えるような若旦那、しかも自分と同年齢の異母兄弟がモスクワから現れ出ることを想像し得たであろうか。二人の出会い、そしてそこにあった驚きと感動。彼等の心が繋がれ、親密な交流が始まる様を我々読者が具体的に思い描くのに、作者ドストエフスキイは光の始原の問題という格好のエピソードを提供してくれたと言うべきであろう。だが創世記が記す光の始原の問題について、二人が具体的に如何なる議論を繰り広げ、そして如何なる結論に至ったのか。このことについて筆者は記さない。これは作者から与えられた課題として、我々自身が心に留めておくことにしよう。

「時」の到来

さて先に見たように筆者は、スメルジャコフが抱く己の出自と運命に向ける憎悪と呪詛、そして「叛逆」の心について、それがまずは様々な「印象」を蓄積させる段階から、やがて突然最後の爆発へと移行する可能性について、クラムスコイの絵画「観照者」と重ねて予言的に指し示していた（本章3）。つまり「観照者」スメルジャコフが「放浪と魂の救済のため突然一切を放棄してエルサレムへと出かけて行ったり」、また「突然故郷の村を焼き払ったりする」可能性である。更に筆者は「場合によってはその両方が一度に起こる」可能性さえ予告しているのであった。イワンの登場と共に、いよいよその「時」が到来したのだ。「地質学的変動」の人神思想を介して生まれた互いへの感動と熱気は、「村の焼き払い」と「一切の放棄」とに向けて、スメルジャコフばかりかイワンの背をも強く押したことが想像される。新たな、しかも恐るべき危険を孕む「寺子屋」教育が開始されたのである。

フョードルの不安と予感

カラマーゾフ家の新しい「寺子屋」で、師たる若旦那から弟子たる下男に伝えられた「地質学的変動」の思想。恐らくこの人神思想を核として、また具体的なテキストとして、この「寺子屋」は教える側と学ぶ側の感動と熱気が交錯する、極めてユニークな教育の場となったことであろう。動物的とも言うべき鋭敏な感受性、あるいは猜疑心の持ち主である家長のフョードルは、既にその熱気の背後にある不吉な何ものかを敏感に察知していた。そして実際、彼はその不安を口にする。先に見たように、棄教者論を展開したスメルジャコフを部屋から追い払った後で、フョードルはイワンに問いかけるのである。「スメルジャコフはここのところ毎度、食事のたびにここに忍び込んで来るではないか。これはそれだけお前が、奴に興味を抱かせたということだ。どうやってお前は奴を手なずけたのだ？」（三８）。この問いに対するイワンの答えは後で見よう（p.３０）。注目すべきはこの時フョードルが、スメルジャコフがアリョーシャをも含む家族全員に対して抱く軽蔑と嫌悪感について指摘し、更には自らの悲劇についてもある種の予感を表明することだ。「ああいうバラム

の驢馬は考えに考えて、その果てに，一人でどこまで考えつくか分かったものではない」「あいつは、他の皆に対してと同じく、俺にも我慢がならないのだ」（同上）。マリアとの逢瀬でスメルジャコフが語ったことを（第１章5）、フョードルは既にほぼそのまま察知していたと言えよう。フョードルは更にこの直後、乱入したドミートリイに殴り倒される。血塗れのフョードルがこの時アリョーシャに表明するのは、ドミートリイに対する怒りでも恐怖でもない。イワンに対する恐怖である。「俺はイワンが怖い。あいつ［ドミートリイ］などよりもイワンの方が怖いのだ。怖くないのはお前一人だけだ・・・」（三９）。フョードルは春のイワンの帰郷以来、カラマーゾフ家で進行していった恐るべき事態を、他の誰よりも敏感かつ正確に、しかも恐怖と共に感じ取っていたのである。

カラマーゾフ家の「寺子屋」についても一言記しておこう。養父グレゴーリイから実の父親フョードルへ、そして帰郷した異母兄弟イワンへと受け継がれたスメルジャコフのための「寺子屋」教育。これは二代にわたる失敗の後で、新たに「地質学的変動」を教材として用いた三代目のイワンにして初めて成功を収めたと言えよう。だが皮肉なことに、師と弟子とは悪魔から伝授されたこの教材で、先代の「寺子屋」の教師、他ならぬ家長フョードルの殺害に向けた理論的準備を整えていたのである。

イワンの「嫌悪感」

出会いの感動から、人神思想の伝授へ。ところが筆者は間もなくイワンが、スメルジャコフの思考の「支離滅裂さ」と言うよりは、その思考の「落ち着きのなさ」に驚かされるようになったと記す（五６）。つまりイワンは、スメルジャコフの心が向かうものは創世記の光の問題などよりも、何か全く別の方向であることに気づき始めたのだ。イワンの内で進行してゆくスメルジャコフ像の変化、より正確にはスメルジャコフに対する厭わしさの増大について記す筆者の筆は、簡潔であり的確である。

更にイワンは、スメルジャコフが投げかける「何か遠回しで、明らかに考え抜かれた質問」の捉え難さによって、ますます苛立たされていったとされる。二人の間で「父親殺し」に向けた動きが、恐らくはイワンの願望を読み取ったスメルジャコフが先導する形で、開始されたのであろう。またイワンはこの異母兄弟が駆り立てられている「執拗な不安」に目を見張らされ、その奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」に、更には「傷ついた自尊心」の存在にも気づき、「嫌悪感」を感じさせられるまでに至る（五６）。春のイワンの帰郷と共に始まった「寺子屋」。そこでの師と弟子の「蜜月時代」は終わりを告げたのである。

「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」

さてスメルジャコフの内に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」。この「自尊心」の存在に気づくや、イワンの内からは「嫌悪感」が湧き上がり、彼はスメルジャコフへの関心を失ってしまったという事実。我々はここに最大の注意を払うべきであろう。つまりこの事実の内にはイワンの悪魔性が、そしてスメルジャコフの悲劇性がはっきりと現れ出てい

ると思われるからである。

スメルジャコフの内なる「支離滅裂さ」や「落ち着きのなさ」、また「何か遠回しで、明らかに考え抜かれた質問」、更には「執拗な不安」や「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」――これらに対して、人並外れて鋭利な知性と鋭敏な感性を持つイワンが正面から向き合い、その拠って来たるところについて、つまりはスメルジャコフの心の内について、何らかの究明の試みをしたであろうか。イワンにはただこれらが「気に入らず」、遂には「嫌悪感」を抱くに至ったとされるのみなのだ。この点でイワンは、彼の父親フョードルがスメルジャコフに対して、その幼い頃から示したような鋭敏な感性も独自の思い遣りも、また強い好奇心や猜疑心も持ち合わせていなかったと言わざるを得ないであろう。イワンこそが正に、「測り知れぬ自尊心」に囚われた若旦那に他ならないことを露呈したのである。

スメルジャコフの奥深くに潜む「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」。それがゆえにイワンが「嫌悪感」を覚え、遠ざかる直接の原因となったこの「傷ついた自尊心」。我々はこれをスメルジャコフの心の闇に、この作品のブラック・ホールの内にアプローチする具体的かつ決定的な手掛かり、鍵として心に留めおき、最終回に改めて焦点を当てることにしよう（第６章5）。それまではなお、この存在を巡る様々な人物やエピソードと、それらが抱える問題について、十分に検討をしておかねばならない。

「悪臭漂う下男」

「あなたはあの頃色々とお話をして下さいました」。「あなたは本気でした」。スメルジャコフの一途な尊敬と熱意に対して、ただ「嫌悪感」の虜となったイワン。このイワンを、逆にスメルジャコフはどのように認識していたのであろうか。そこにあるのは、ただひたすら一途な尊敬と熱意だけだったのだろうか。ここで視線を改めてスメルジャコフの側に戻し、二人のその後の交流について追っておこう。

スメルジャコフが見たイワン像。その一つは、前回から見ているように、マリアとの逢瀬の際にスメルジャコフが発した言葉の中に見出されるであろう（第１章5）。この時スメルジャコフは、グレゴーリイとイエスへの呪詛の言葉に続いて、祖国ロシアとロシア農民と外国人に対して軽蔑と呪いを投げつけ、更に進んで異母兄弟であり若旦那であるイワンとドミートリイに対しても痛烈な批判と弾劾を投げつけたのであった。つまりスメルジャコフによればイワンは、自分のことを「悪臭漂う下男」であり、今にも「謀反」を起こしかねない奴だと語ったとして指弾され、ドミートリイもまた、品行の点からも、頭の程度の点からも、懐の中身の点からも、どこの下男にも劣らず「空っぽ」でありながら、誰からも尊敬されるとして血祭りに上げられたのであった。スメルジャコフは既にドミートリイの品行と頭と懐の内ばかりか、イワンの心の内にも深く分け入り、彼に対する傾倒の一方で、この師が自分を「悪臭漂う下男」としてしか見ず、しかもこの下男が今にも「謀叛」を起こしかねないと疑う若旦那であることを見抜いていたのだ。

「下男で下種野郎」

スメルジャコフを部屋から追い出した後、フョードルがこの下男について、イワンと語り合う場面にもう一度戻ろう。つい先に見たように、ここでフョードルはイワンに、最近食事の時ごとにスメルジャコフがやってくることを指摘し、如何にしてお前はあいつを手なずけたのかと問うたのであった。これ対するイワンの答はこうである。

> 「決して手なずけてなどいません。僕を尊敬する気になっただけです。
> 下男(ラケイ)で下種野郎(ハム)なんです。尤も時至らば、前衛的肉弾(ペレダヴォエ・ミャス)とはなるでしょうがね」
> （三８）

「下男」で「下種野郎」、そして「前衛的肉弾」。注目すべきことに、また驚くべきことに、イワンはこれらの言葉以外にも、「卑劣漢」「臭い悪党」「畜生」、そして「馬鹿」「毒虫」等々、意識的にも無意識的にも、スメルジャコフに対して面と向かって数々の蔑称を投げつけ続ける。家畜追込町のイワンとは、「下男」に向かい、大学での知性溢れるインテリ青年とは思われぬ側面を露呈する「若旦那」なのだ。父親殺害後の二度目の訪問の際には、怒りと興奮のあまり、彼はスメルジャコフの肩を拳で力任せに殴りつけるであろう。「恥ずかしいことですよ、若旦那、弱い人間を殴るなんて！」（十一７）。イワンは、自らの口をついて出るこれら蔑称と粗暴な振る舞いのことを、果たしてどこまで自覚していたのであろうか。また若旦那から発されるこれらの蔑称を、下男スメルジャコフは果たして馬耳東風と聞き流していたのであろうか。

三度目で最後の訪問も終わり近くのことだ。この下男に導かれ、自らの罪を最終的に自覚させられ、かつ神に見つめられる自分を発見させられたイワンは、たとえ一人ででも法廷に出て「父親殺し」の罪を自白すると宣言する。だがこのイワンに対し、スメルジャコフは自白しても無駄であることを告げる ――「なぜならば、その場合には私は皆に言ってやるでしょう。あの人は私にでっち上げの罪を着せたのだ、というのも、あの人は私のことを人間とは見なさず、蠅くらいにしか思っていなかったのだからと」（十一８）。

「私のことを人間とは見なさず、蠅くらいにしか思っていなかった」。スメルジャコフの内に蓄えられた認識である。イワンとスメルジャコフの出会いから交流へ。異母兄弟の間に生まれた熱気を描くドストエフスキイが、若旦那と下男との間に設けた「落差」は決して小さくはない。

「傲慢さ」

今挙げた二人の対話に続く場面である。スメルジャコフは、なお法廷での自白に固執するイワンに対し、あなたが法廷に行くはずがないと突き放す。彼はその根拠として、イワンが金と名誉と女が大好きであることを指摘し、更に断言する。「あなたが何よりもお好きなのは、安穏な満ち足りた中での暮らしなのです。それというのもあなたは誰にも頭を下

げたくない、このことが何よりも大切なお方なのですから」――下男にとっては、大旦那とそっくりの若旦那が、法廷でそんな恥を引き受け、人生を永遠に台無しにすることなど、決して望むはずはないのだ。

「お前は馬鹿ではない」。いつの間にか自分の表も裏も見抜いてしまっていたスメルジャコフ。その眼力の鋭さに驚天させられたかのように、イワンの「頭には血が上った」と記される。続くイワンの言葉と、スメルジャコフの反応も併せて挙げておこう。

「以前は、お前を馬鹿と思っていた。お前は真剣だな！」
「私を馬鹿と思っていたのは、あなたが傲慢だったからです」(十一８)

異母兄弟を「下男」とも「下種野郎」とも、そして「卑劣漢」「臭い悪党」「馬鹿」とも蔑んで称し、その下男の内に疼く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の存在に気づいても、その心の内を一片たりとも理解しようとはせず、「嫌悪感」と共に距離を置いてしまった若旦那イワン。スメルジャコフが用いた「傲慢」という言葉は、「地質学的変動」の思想を貫く「倨傲の精神」とそのまま繋がる言葉である。この言葉を心に留めていた弟子は自らの師に対して、この言葉を最期の評言として投げつけ、間もなく自らの命を「絶滅させる」であろう。スメルジャコフの自死を予感しつつも、イワンはその場を去ってゆく（十一８）。「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」に続く、イワンの「兄弟殺し」である。イワンによって「絞首台への道」に追いやられたスメルジャコフは、だがイワンを自死よりも更に過酷な「十字架への道」に追いやるであろう。この「絞首台への道」と「十字架への道」については、次回以降に検討しよう（第３章6、第６章5等。拙著『カラマーゾフの兄弟論 ―砕かれた魂の記録 ―』後篇ⅦC「スメルジャコフ」も参照）。

『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべきスメルジャコフについて、前回と今回の二回で我々は，彼の精神史のほぼ全体像を見渡せるところにまできたように思われる。そして彼の心の奥底に蠢く「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」についても、皮肉にもイワンの「倨傲の精神」が明るみに出すところとなった。次回はこれに対し、イワンの精神史を概観し、二人の精神史が切り結ぶところ、そこに何が生まれたのかについて、改めて考察したい。

（第２章　了）

２０１８年1月
２０１８年１２月一部加筆修正

次回、第3章、研究会便り(１０)について

次回の第３章、研究会便り（１０）は、イワンに焦点を絞り、「ロシアの小僧っ子」イワンがモスクワにおいて、如何なる思索を展開していたかを概観します。今回のスメルジャコフに続き、イワンの精神史を明らかにして初めて、二人の出会いと交流と対決の意味も明らかとなるでしょう。

ドストエフスキイ文学の総決算とも言うべき、イワンとスメルジャコフとの三度にわたる対決。二人の精神の足跡が交錯し、そして離れてゆくドラマは、思想的には「地質学的変動」の人神思想を巡る、また現実面では「父親殺し」を巡るドラマとして展開してゆきます。

血の「一線の踏み越え」の後、二人はそれぞれの良心に臨む「裁きの神」によって、懼るべき地獄に突き落とされます。その地獄の底での三度にわたる対決とは、各自の罪の自覚と、神との出会いに至るドラマなのですが、その末に控えているのは、スメルジャコフの自殺という新たな悲劇です。

最後に、二人の兄の悲劇を見守り続けるアリョーシャの「祈り」を検討したいと思います。そこに見出されるのは、二人の兄に向けられたアリョーシャの深い愛であり、その「実行的な愛」に立つ、悲劇への透徹した認識です。